

多職種連携にむけた福祉用具使用の情報共有への取り組み

名古屋市瑞穂区
アミエ株式会社
介護事業部
横田 恵一

Keyword：手技の統一（多職種連携）、福祉用具のわかりやすい使い方（見える化すること）、
個別性に応じる（状況に応じたアレンジ）

1. はじめに

介護現場において、福祉用具を、使いこなすことができるのか？が、重要な要素となります。それは安全・安楽の面においても、介護負担軽減においても当てはまります。また重度の介護が必要な方になればなるほど、その要素の重要性は高まります。ただ実際の介護現場において、うまく使いこなせていない場面や福祉用具はあるが使われていない場面も目にします。その背景として使い方がよくわからなかったり、同じ福祉用具であっても、身体状況等において異なった使用方法であったり、設定等手技が複雑であるといった理由が挙げられます。また、さまざまな方から介護を受けるという現場の状況もあり、手技の統一という点は、日々の介護と福祉用具の使用において重要課題になります。それらの課題に対しての私どもの取り組みを紹介させていただきます。

2. 取り組みについて・・・手順書・提案書の提示

介護現場における、福祉用具事業所（貸与・販売）の役割として、①身体状態の確認・現状の課題の整理②福祉用具の選定③実際の福祉用具との適合性の評価④継続的モニタリングという、大まかな一連の流れがあります。この中の③の部分、本人の状態だけでなく周りで介護に関わる方々との適合性の影響も受けます。その方々が正しく使用できるようになることで、福祉用具の特性の最大限の効果が期待でき、安全安楽快適に使用できるようになります。そのために情報共有を目的に状況に応じて手順書・提案書を作成させていただいております。

3. 具体例

■事例1：脊髄損傷、褥瘡保有されている方の介護の場合（図1・2）

肩から先をほとんど自分で動かすことができない方で、ほぼ全介助の状況です。仙骨周囲に褥瘡もあったため、背上げの角度・時間の制限もあり管理が必要な方でした。創部の治癒促進・悪化予防を優先し、手技の統一化を図る目的で手順書を作成いたしました。ベッド・エアマットの操作、本人に対する介護方法を載せました。手順書を通じ、本人との意思疎通、生活の目標の共有を図ることができ、訪問介護・訪問看護の方と手技の共有ができました。その後、身体状況は良好に推移しました。



図 1



図 2

■事例 2：股関節拘縮のある寝たきりの方の介護の場合（図 3）

入院加療中に長期臥床のため寝たきり・股関節の拘縮が起こってしまい、下肢は伸ばすか、膝を立てるかのどちらかの姿勢しかとれない状況でした。ベッドの背上げ機能を使用される方であり、腰部・踵への外力が強くなるのが想定されたため、ベッド上での姿勢管理の提案をさせていただきました。介護方法の根拠・危険性を示し、用具の使用方法について図解にして提案させていただきました。本人の理解も得られ、実際の介護方法としても活用いただきました。

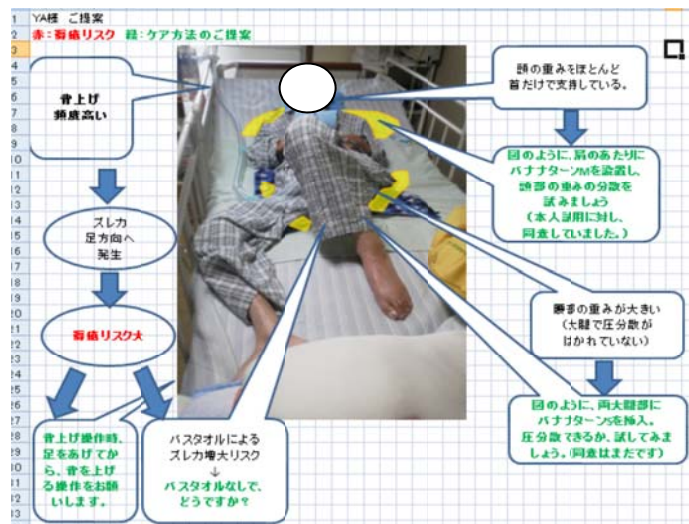


図 3

■事例 3：車椅子姿勢保持を保てない方の介護の場合（図 4）

車椅子での姿勢が崩れやすく困っていると、介護されているヘルパーから相談を頂きました。同行させていただき姿勢の確認をし、現在あるもので姿勢保持ができないか、を検討しました。本人の状態を確認しながら、安全・安楽な姿勢管理を行い家族・ヘルパーが再現可能なように、姿勢だけでなく介護の要点も添えて図式化しました。関わる方々の介護手技の統一が図れ、本人の身体的負担も軽減することができました。

